



小田実全集（小説 第29巻）

生きとし生けるものは



講談社  
小田実全集



*Makoto Oda*



生きとし生けるものは



(喜劇。アテナイの喜劇には、古、中、新、三時期の喜劇があつた。古喜劇は、その時代のもつとも力ある人物たちを名指して攻撃するためのものとしてあつた。これは紀元前三九三年に終つてゐる。中喜劇は合唱部分を失なつたが、いぜんとして有名人物を、それとおぼしき人物の姿をかいて攻撃した。これは紀元前三三七年に終つた。新喜劇はわれわれの場合のコメデイオプ・マヤノス風俗喜劇であつた。あるいは、プラウトウス、テレンティアヌスのたぐいとすればもつともよく理解できるだらう。「リデル＝スコット希英中辞典」)

うちのオナゴどもが勢ぞろいしている。

バアさん。長男のヨメの直子。孫のヨメのキク子。孫は四人いるが、キク子は次男の子どものヨメだ。漢字で何んと書くのだったか、このところずっと忘れていた。だから、キク子だ。それからヒ孫のつち。奇妙な名前だが、これはキク子がつけた。つちというのは大地ですよ、だから女ですよ、とキク子はそのとき言いはった。しようがないですよ。このさいキク子の言うことをきいておかないと。これはバアさんが言いはった。つちは今年で四歳。かわいらしい、かわいらしい、と人が言う。散歩に連れて歩くと、そんなふう言ってくるのがある。たしかにそう言われてみれば、かわいい顔をしている。満更でもない。

この四人のオナゴが勢ぞろいしていた。ひとりはまだほんの赤んぼうに毛の生えたようなものだが、それでもオナゴはオナゴだ。わたしが散歩に出ようとしたら、門のところに四人が立っていた。着かざっているというのではなかったが、どこかしらよそ行きのフンイ気がある。バアさんがフロシキ包みを下げている。直子がゴザを丸めて持っている。キク子はバスケット。いっとう小さいのは、小さな水筒を肩にかけていた。

さきのことわっておくが、バアさんはわたしといっしょに住んでいるが、しょっちゅう近くの直子のところに入りびたっている。キク子は直子よりさらに近いところに住んでいる。直子は貧弱な建売りのものながら一戸建て。キク子はマンション。豪勢なのかどうか知らんが、下の玄関の扉は電気じかけで開け閉めする。下でブザーを押すと、やがて上からの声があつて、よろしいとなると開いてくれる。上にはテレビもついていて、ブザーを押した男の人相ふうていを判断して、扉を開けるかどうか

か決める。そのうちわしの人相ふうていを見て開けやらんようになるんとちがうかとバアさんに冗談を言ったら、ほんまにそうなるんとちがいますかとバアさんはいやみを返して来た。それを聞いていたつちが、心配せんかてええ、おじいちゃん、つちがドア開けて入れてあげますと言いつちが出た。ませた子である。バアさんが呆れ顔になった。ハッハッハッつちがわたしは笑つたが、何やら気色のわるい気持になったのもたしかだ。キク子はそのときそこにいなかった。彼女が昔熱中したロックのバンドで、もうみんな年をとつておなかの出つぱつてしまったのが（そうキク子が言つたのだ）久かたぶりに大阪で公演をやる。ぜひ行きたいと出かけてしまつていたので。そういうとき、つちはバアさんに押しつけられる。つまり、わが家に来る。

四人が門のところに勢ぞろいしているのを見て、どこへ行くんだ、と声をかけた。おじいちゃん、いっしょに行きはりませんか、と答える代りにキク子がキンキンまわりにひびきわたる声で言つた。地声だが、何度、何十度、何百度聞いても、あれはしんどい。やめてくれ、と言つても、わたしの地声はこれよ。頭のとつぺんから声が天にとどけ、とばかりに出て来る。

どこへ行けと言うんだ、とわたし。

幼稚園、とこれはキンキンの地声。

バアさんが横から、今日はつちの運動会がありますのよ、とやけにあらたまつた言い方で言つた。

おじいちゃんも行ってあげなかつたら、と直子がつづける。彼女の口調にはいつもどこかケンがある。言い方はテイネイなのだが、ふくむところがある。女たらし、女のたれ流し、グウタラのあなたの息子をお守りして来てやつたのはこのわたし、と言いたいのだろう。この親にしてこの息子あり。

そうも言いたいのか。しかし、わたしは息子とちがつてグウタラではない。

運動会へ行つて、何をするんだね。

見るんです。バアさんがあたりまえのことを口にした。口を開けると、歯があらかた抜けているのが見える。入れ歯のぐあいが変わるくなって、今、取り外しているのだ。しかし、それは口実かも知れない。今までの金歯がそのままむき出しに見えている。ああいうのは、今日、成金趣味ではやらない。金歯を入れた上にもうひとつ何かかぶせて見えなくする。このほうがもうひとつ何かがあるので、高くつくにきまつている。バカなことをする、と思つたが、黙つていた。言い出すと、おじいさんのほうがもつとバカなことを、それもしよつちゆうやつている、と言ひ返すにきまつているからだ。そんなことは一向にかまわぬが、いちいちわたしのやつたバカなことを列挙されては聞いているのがしんどい。耳が遠ければ聞こえなくていいが、わたしはこの年、八十五歳で、歯も丈夫だし、耳もよく聞こえる。わたしがいつかそう言つと、吉田が、総監、オトコの力のほうもまだまだおとろえを見せつけていませんな、とすかさず言つた。

駆けっこ、ゲーム、お遊戯。

つちが小さな指を折つた。

駆けっこは走る。ゲームは遊ぶ。お遊戯はおペンキョウ。

誰が教えたのか、そんなことを解説するように小さな口から出した。

ああ、それからね、おじいちゃん、クミタテ体操。

何んじゃ、それ。

わたしはほんとうに知らないので訊ねた。

体操するんよ、立ったり、坐ったり、ねころんだり。トウキョウ・タワーができるよ。カプトができるよ。ハシがかかるよ。おじいちゃん、知らんの。

四歳——正確には四歳半が八十五歳——正確には八十五歳半に言った。おたがいの年のことが正確に心のなかに出て来ると同時に、そうか、もうあれから五年になるのかと思ひ出した。早いものだ、しかし、たしかにあのとき、ひともめはしている。

でもね、それはつち、はしない。つち、は赤組さんだから。ミドリ組さんがするの。赤組さんと黄組さんはまだ小さいから見ているの。

つち、は不満げに口をとがらせた。三年保育の幼稚園で、赤組、黄組、ミドリ組の順番で大きいのに進む。これはバアさんから聞いていた。ミドリ組さんのあとは何、とわたしもつち、に訊いたことがある。ガッコウ。そう切り出してから、彼女はさっきのように指折り数えた。シヨウガッコウ、チュウガッコウ、コウトウガッコウ、ダイガク。それから、とわたしは訊ねた。それからはオトナ、とすぐ彼女は切り返すようにつづけた。この子、利発なお子だ。

他に何がある。

八十五歳半が四歳半に訊ねる。

他に……と考え込んだところで、おせつかいに直子が、綱引きがありますのね。

と横から口を出した。

綱引き？

思わず訊ね返すと、ツナヒキ、おじいちゃん、知らないの、と四歳半が小しやくな口のきき方をした。こういうのはよろしくない。老人をバカにしてはいけない。

しかし、これは子どもがやるのではないそうだ。父親がやる。キク子がキンキン声を出した。幼稚園の運動会なんか父親が来るのか。わたしが大声を出すと、来ますよ、みんな、来はります、と直子がたしなめるように言った。今日はそんなアホウな父親がいるのか、とつづけようとしたが、そのままに、つちが、おじいちゃん、来て。来て、綱引きして、と甘えた声を出した。四歳半でも、そこはオナゴ、甘える術をすでに心得ている。それから、もうひとつ、殺し文句を口に出した。来てくれて、綱引きしてくれたら、つち、おじいちゃんといっしょにおフロに入つてあげる。おフロでジグソウパズルやつたげる。

あれは何んと言うのか、ああ、ぽり、うれたんと言ったか、おフロの壁にちよつと水で濡らしてペタペタはるとくつつくがある。いつかつちとおフロに入つていたときに、バアさんが、これ、キク子が使いなさいと持つて来た、と言つて、ゾウさんやらサイさんやら、あとはワニにカンガルーにトナカイにウサギだったか、いろんな動物のかたちをしたぽり、うれたんをおフロの扉を開けてわたしに渡

した。いや、わたしが受けとるさきにつちが奪い取っていた。おじいちゃん、これ、ぼり、うれたん、言いますねん、と教えてくれたのは、実は彼女だ。

水をちよつとつけてペタペタ壁にはると、たちまちのうちに、壁に動物園ができあがった。はじめはワニさんがトナカイさんのお尻にくらいつこうとしていた。かわいそう、と言ってワニさんをつちははずす。キク子さんは（とつちはキク子のことを呼ぶのだ。キク子がそう呼ばせている）トナカイやから、とわけの判らないことを言う。彼女は昔はいざ知らず今は小ぶとりにふとつて来ていて、とうていトナカイの敏捷さはない。じゃあ、ウサギさんのお尻をパクリ。わたしがワニさんをつちの手から取ってウサギさんのお尻にくつつけようとすると、ダメ、ダメ、つちはウサギさんだから。つまるところ、ゾウのお尻にワニさんはくらいついた。ゾウさんはおじいちゃん。何をぬかすか、小さいくせに。

カンガルーさんはサイさんの上に乗った。どうやら立ったまま眠っているようだ。こつちもいい気持ちになって眠くなつて来た。そろそろあがるか、おじいちゃんは冷たいビール。つちはカルピス。これは彼女が自分で言った。

このぼり、うれたんの動物園は、このあいだパパがニューヨークに行ったときのお土産に買って来た。そう、つちは冷たいカルピスをゴクリゴクリとのみながら説明した。

その次のときは、同じぼり、うれたんのジグソウパズルを持って来た。今度はキク子かとどけに来たのではない。おじいちゃんとおフロで遊ぶのだと言って、つちが自分で持って来た。これはキク子が輸入物を扱うオモチャ屋で買って来たものだ。そう、つちが言った。クジラがシオをふいている。ま

わりの海にタコさん、イカさん、カニさん、それとたぶん、あれはイルカか、みんながいる。これ、おサカナがカイギを開いている。つちが説明した。

これをバラバラにほぐしてから、また組み立てる。いや、水に濡らして壁にはりつける。これは動物園づくりとちがつて、やはり、時間がかかる。でき上ったときには、つちもわたしも真赤にゆで上っていた。タコさん。つちが指さした。西洋人は、ふつう、タコをゆでて食べたりしないから、このぼり、うれたんのおサカナの会議、輸入品のオモチャ屋で買って来たというが、案外、国産のイミテーションだったかも知れない。

窓を開いた。たちまち、風が入って来た。あのままでいたら、二人とも真赤にゆでられたままぐつたりしてしまっていたかも知れない。窓からはすぐまえの海が見わたせる。吉田に頼んでこの会長用の社宅の二階にフロをつくったのも、フロに入りながら海を見たかったからだ。もつとも、海は小さい。コン畜生の埋め立て地が左右から伸びて来て、海を先のすぼまった三角形にしてしまっている。それでもこのあたり、わずかな長さだが、砂浜も残っている。その貧弱な砂浜を見下ろしながら深呼吸をした。

おじいちゃん、何をしているのですか。

鳥を見ている。

砂浜の上を、ユリカモメが群れをなして飛んでいる。この三角形の海には、冬になると北からの渡り鳥がやって来る。シベリアあたりからでも来るのかも知れない。いろんなのが来るようだが、いちばん多いのがユリカモメだ。パンの切れはしでもやると、群れをなして飛んで来る。今もギャアギャ

ア騒ぎながら飛んでいるのを見ると、下の砂浜で誰かがパンを投じているのかも知れない。

あれはまだ三月のはじめだったから、ユリカモメはいた。その寒い季節にいくらおフロで真赤にゆで上ったと言つても窓を開けたりするのは、いささか乱暴であつた。わたしとつちがそんな問答をしたあと、二人は同時に大きく咳をした。わたしは慌てて窓を閉めたが、あとでつちは風邪で寝込むはめになり、自分からそうしたのか、それともキク子が禁じたのか、つちはおじいちゃんとおフロに入らなくなった。壁におサカナの会議のジグソウパズルを残したままであつた。

わたしは、そのうち、自分でもフロに入りながらぼり、うれたんのジグソウパズルをやり出した。つちが残して行つたものひとつでは飽きる。それにいかにも子供むきで単純すぎる。二つ三つ、吉田の会社の若い女の子にヒ孫が使うものだと言つて買って来てもらったが大同小異、真面目な大人のオモチャにはとうていならない。じゃあ、つくつて上げましょうか、と吉田が殊勝なことを言い出した。総監の八十五歳の誕生日のお祝にどうです、とわたしのかつての部下、のことははつづく。ヒラ巡査が叩き上げて、あれでも警部ぐらいのところにまで上つたか。しかし、こいつには、金儲けのほうがむいていた。在職中から、わたしも知らないあいだにパチンコ屋、ゲーム屋、土建屋、不動産屋、そのときどきに羽ぶりのよい業者からしこたままき上げていた——と聞いたのはあとのこと。クビになるまえにさつさとやめて、しこたままき上げていた土建屋の会社に入つて、そのうち、会社のボスが死んだところであまいことボスの奥さんごと乗つとつた。

何つくつてくれるというのだ。

おたくのおフロの壁にペタペタはるジグソウパズルのオモチャですがな。モノはぼり、うれたんでつか。

会社にデザインやっている若いのがいる。しようがないグウタラだが、デザインはなかなか上手だ。そいつに下絵を描かせて、ぼりうれたんで全部そいつをつくって上げる。全体ができあがったところで出タラメに千切つて、これでジグソウパズル、いつちようあがり。

総監、何、描かせますか。やつぱし、オナゴはんの絵だね。男はいくつになつてもみんなオナゴはんが好きなものやし、総監は人一倍オナゴ好きや。

わたしはニコリともしないで言つた。

どんなオナゴがいいかね、パズルにするのは。

そりや、きまつてますがな、総監のお好きなオナゴはんにきまつてますがな。

ああ、そんなら、ジャクリーヌ。

ジャクリーヌ？

吉田はおどろいた声を出した。ハトが豆鉄砲をくつたというのはあのとときのものと巡査の顔だ。それとも、突然、警官のカガミだとして表彰されたとき、このもとワル巡査はこんな顔をするのか。

ピストル射たれて殺されたケネデイいうアメリカの大統領がいましたな。あの人の奥さんにジャクリーヌというのがいた。ケネデイが殺されてから、オナシスというギリシア人で世界一の大金持と結婚しよつた。

ケネデイもジャクリーヌもさすがに今もつて有名である。こんなことに一向にうとい吉田もさすがにそこまで言くと、ジャクリーヌが何者か判つたようであつた。世界一の大金持のことは知つていたかどうか、そこは心もとなかつたが、この知識の有無は話の本筋に関係がない。

きれいな人でしたな。もう年とつていはるやろけど。  
そやけど、まだわたしよりずっと若い。

人間、年をとると、たのしみがかえつてふえるもんやとわたしはいつか吉田の息子相手に言つてやつたことがあつた。年をとると、オナゴのたのしみがなくなりますな、と何思つたのか、二十五歳になる、いや、二十五歳にしかならぬ若僧が小シヤクな口をきいたのだ。親のひきで、若僧は吉田の会社で部長をやっているのだ。ええか、あんたやつたら、あんたより若いオナゴは二十五歳以下だけやろ。わたしやつたら、八十五歳以下はみんな若い。自分より若いおなごの数考えてみい、どっちが多いか。  
ジャクリーナもまちがひなくわたしより若いのだ。

ひと月経つたら、見知らぬ男がお申し込みの品持つて参りましたと、うすつぺらだが大きな長方形の段ボールの箱をライトバンに乗せて持つて来た。女中のトヨがそのむねわたしに伝えて来たので下の応接間に行くと、もう男は立ち去り、段ボールの箱からビニールの袋に入った中身は取り出されていて、床のペルシヤ製のダンツウの上に大きくひろげてあつた。大きなもので、人物はまず等身大と  
いうところだ。

なんですか、この女。

バアさんが言つた。あいにく直子までそこに来ていた。

ジャクリーナ。ジャクリーナ・ケネディ。それとも、ジャクリーナ・オナシスと言うべきかね。アメリカ人はジャッキーと呼ぶようだね。

ヌードではなかつた。べつにヌードのジャッキーを考えていたのでもなかつたが、この着衣の彼女

を見ると、なんでヌードにしよらんかったのかと急に思い出した。

これ、どうなさるんですか、とこれは直子。

ああ、おフロの壁にはるんだよ。ほり、うれたんやから、水を少しつけると、ピツタリはれる。ジグソウパズルやから、バラバラにしたのをおフロに入りながらあれこれ考えてはる。

つちにこんなもの、やらせられません、とこれはバアさん。

つちが遊ぶんやない。わたしが遊ぶんだ。言うなれば、大人のオモチャだ。

そう言つたとたんに「大人のオモチャ」というのは、セックスがらみの器具のことを巷間言うのではないかと気がついた。しかし、このジャッキ、着衣でいる。せめてヌードにできないものか。

キチガイ沙汰ですよ。

バアさんが怒つた声を出した。

おフロでこんなことをなさっていると、またいつかみたいにくれて、卒倒しかかりますよ。

直子が同じ声で言つた。

人間、八十歳を越すと、誰も彼もキチガイだよ。そんな年で生きていくこと自体が狂っている。そんな年で子どもができれば、ふつうなら大騒ぎになつても、かえつてめでたいことになる。

わたしは自然に口に出かかつて来たことばを次々に口に出したが、二人は黙っている。わたしはつづけた。

これでおフロでこの美女と遊んでいるうちに昇天すれば、めつけものだ。

この人、そんなにおきれいですか。

直子が不服げにさえぎった。返すべきセリフがなくなつたので、ホコ先をかえたのだ。

世界でいちばん強い国の若ボスのハートをしとめ、世界でいちばんの大金持のじじいのイチモツをふるい立たせたんやから、きれいなんとちがうか。

おじいちゃんにわるいけど、わたしにはそんなにきれいな人と見えません。眼は大きすぎるし、お鼻はかつこうわるくてこれも大きすぎるし。なんだかキツネつきみたい。

直子はバアさんとともに、若ボスのハートはともかく世界一の大金持のイチモツうんぬんにマユをひそめたが、それでも負けずに悪態をついた。

おじいちゃんのイチモツはふるいたたんというわけか。かつこうなことだ。

笑い出していた。あと、何をバアさんと直子、言うことがあるか。そう思ったが、それにしても、なんでヌードにしなかつたのか、このキツネつきのジャッキをまるはだかにしてくれなかつたのか。

これ、何んです、手にもつていはるもんは。

バアさんがまた口を出した。

そう言われてはじめて気がついた。椅子に坐つた白いワンピース姿のジャッキは、両掌で何やら黄色いものをいくつか抱えている。

おイモですか、これ。

直子も横から口をあわせた。声にどこか小バカにしたひびきがある。そう言われてみれば、サツマイモのふかしたのを両掌でかかえているふぜいがないこともない。

マンガーとちがいますか、ダンナさんの好きな。

それまで黙っていたトヨが口をきいた。

なるほど、そう言えば、戦争中の南方ぐらしから病みつきになったマンゴーだ。インドネシアにいたときふんだんに食べた。こんなにうまいクダモノはないと思つた。戦後はずっと手に入れることができなかったが、このごろはいくらでも出まわつてゐる。わたしもしょつちゅうトヨに買いにやらせてゐる。トヨも好きで、わたしといっしょに食べる。大きな九谷焼の鉢をわたしはクダモノ入れに使つてゐるのだが、そこに山盛りにしたのをトヨがもつて来ると、いつもひとつは必ずやることにしている。そして、いっしょに食べる。彼女も、こんなにおいしいクダモノはありません、と言う。出戻りの五十歳で、子どもは二人いたが、二人とも、父親のほうにとられてゐる、かわいそうな女だ。もつとも、マンゴーのひとつやふたつ、わたしのところに持つて来るまえにくすねるぐらいの才覚はもつてゐる。マンゴーも、ひとところにくらべると安くなつた。円高のせいか。もつとも南方の現地では、百円も出せば、山と買える。

トヨに手伝わせて、フロ場の壁にマンゴーを両掌にかかえたジャッキをはつた。バアさんと直子にも手伝えと言つたが、二人とも忙しいと言つてとりあわない。いや、直子は、おじいちゃんの大人のオモチャでしょう、おひとりでお遊びにならなくちゃあ、といやみを言つた。しかし、かえすがえすも残念なのは、かんじんのジャッキが着衣であることである。それも肩もあらわなブラックのイブニングドレスでも着ていれればいいものをいかにも野暮つたい白いワンピースを着ている。小一時間かけてジャッキを壁にはりつけてから、わたしは吉田に電話をした。

どうです、世界一の強国のボスと世界一の大金持になつた気持でつか。

わたしがしゃべる先に、わたしがよく口にするセリフを使って吉田が口をきいた。

しかし、あれ、なんでヌードにせんかった。

わたしは不服を口に出した。

それはですな。……

吉田はゆつくり説明し出した。噛んでふくめるような、その言い方で相手をたぶらかせてただの原野をゴーセイな別荘地に思わせるような、そんな言い方だ。わたしは、巨大、悪趣味のマホガニーのデスクをまえにして社長室の皮ばりのこれまた巨大、悪趣味の椅子に坐って慣れない葉巻を口にくわえてしゃべるもと巡査の姿を思い浮かべた。いや、その姿が自然に眼に浮かんで来た。

彼も、はじめジャッキーをヌードにしようと思ったのだという。実際、そのつもりで下絵を描かせるデザインの若い男に命じた。若い男はものを知らん今どきの若者らしくジャッキーのことは何んにも知らんかったらしいが、それでも社長の命令である、あっちこちからジャッキーの写真を集めて来た。その写真のなかに、イタリアだかアメリカだかの写真家のご苦労さんにもアカラングをつけて海中にもぐって水中カメラで撮ったヌード写真があつたそうだ。ジャッキーとオナシスがどつちもまるはだかで泳いでいる。ギリシアかアメリカの彼らの別荘の海では、二人ともヌードになつて泳ぐくせがあつたらしい。それをカメラマンがかぎつけて、アカラングに水中カメラとなつたらしいが、まったくアホなことを人間はするものだ。人間狂うのは何も、八十歳を越してからのことではないらしい。それともこの連中、八十歳を越すと、逆に正気になるのか。

この写真、連中は世界じゅうの雑誌やら新聞やらに売って大儲けしたらしいが、それを見た吉田の

会社のデザイナーの若僧は、あきまへん、あきまへん、こんなヌード使えません、と言い出した。イチモツまる出しのおいぼれオナシスはじめから論外だが、ジャツキーのほうも、これは何んだね、ガリガリの上身にお尻だけがむやみと大きい。人魚と言いたいが、イルカ人魚だ。イルカ人魚のヌードは美学的に見ていただきかねますな。社長がこれ上げなざる人、今は知らんけど、昔はえらかった人なんですやろ、こんなイルカ人魚のヌードあげたら失礼です。

そういうわけでヌードはやめたんですわ、ジャツキーはんのヌードは。

吉田は「ジャツキーはん」と心やすだてに言つて笑つた。吉田がそういう言い方をすると、ジャツキーがそこらのバーかサロンにいる若い子に思えて来るからふしぎである。

それでジャツキーはんに着物着せたのかね。

わたしも同じ言い方をした。サロン・ホワイト・ハウスの売れっ子ジャツキーはんである。それとももうトウが立つてしまったもと売れっ子子のジャツキーはんか。あのころは世界一の強い若ボスも世界一の大金持のじいさまもパトロンについていた。すべては過ぎ去つた遠い昔のことである。しかし、わたしがいるぞ、がんばれジャツキーはん。

しかし、彼女になんでまたマンゴーもたせた。

わたしはジャツキーはんにかかわるもうひとつの疑問を口に出した。

総監、いつかマンゴーが好きやと言うてはりませんでしたか。インドネシアに司政官で行つてはつたときに好きになつたと言いはつて。わたしも好きですね。そう総監に言うたことありましたやろ。フィリッピンに兵隊に行つていたときにはじめて食べて、えらいうまいクダモノやと思うた。そう言

いましたやろ。

なるほど、そう言われてみれば、たしかにそんなことをこのもと巡査が言っていた。いいかげんに聞き流していたのだが、わたしという佐官待遇の司政官とただの兵隊の吉田はインドネシア、フィリピンとところはちがえど、同じころ、南方で苦勞し、また、マンゴーを食べていたことになる。

フィリッピンの女はよろしましたぜ。このあいだ、また行つて来ました。インドネシアのほうはどうでしたか。

せめてドリアンをもたせたら、よかつたのところがうか。

アホなセリフをつづけようとするもと巡査をわたしはさえぎつた。

あれは南方ではクダモノの女王というのだ。ジャッキーはんにはそちのほうがふさわしい。

なにしろ今はトウが立つてしまったとはいえ、かつては世界一の強国の若ボスのハートを射抜き、世界一の大金持のおいばれのイチモツをふるいたさせた女性なのだ。クダモノの女王ぐらいはもたせてやれ。その同情の氣持あつてのわたしのことばだったが、もと巡査は、

あれ、臭いね。オナゴのあそこの匂いという人もいるけど、ほんとはウンコの臭い。

と二べもなく言つた。もと巡査、もうちよつとふぜいのある言い方ができないものか。

つちも入つての赤組さんと黄組さんの子どもの紅白の玉入れのあと、ミドリ組さんの組み立て体操があった。もう小学校へ入る直前とあつて赤組さん、黄組さんの子どもとは比較にならないほど大きくなつた子どもの出番だ。つちが朝が言つていたように何人かが組んで立つたり、坐つたり、寝ころんだりして橋をかける、カプトのかたちをつくる、ついにはタワー——トウキョウ・タワーをおつたてる。つちのような小さな組の子どもも早くそういうませたことをやりたいのだ。見よう見真似で、横で何人かが立つたり、坐つたり、寝そべつたりしている。つちも仲よしの女の子らしいのと二人でやつていたが、どうもつちは、動作がにぶい。ジャッキーはどうだつたか。妙なことが気になつた。

そのあとがいよいよお待ちかねの父親たちによる綱引きである。「どうぞ、おじいちゃまもかわいなお孫様のためにご出場、ご活躍なさつて下さいまし」と黄色のツバつきの運動帽をかぶつた園長先生のおばさんがマイクで叫んでいる。直子と似て口調はバカテイネイだが、なかなか精カンな顔つきをしている。精カンは精カンだが、直子のようにケンはなく、そこはよい。しかし、このおばさんさすがに「ヒイおじいちゃまもかわいひ孫様のために御出場、御活躍を」とまでは言わない。アマノジャクのわたしのことだ、そこまでおばさんがしやべつたらかえつて出て行かなかつたかも知れない。とにかくそのセリフはなかつた。おかげでアマノジャクのヒイおじいちゃんのかえつてふるい立つ。かわいひ孫様のために千万人といえどもわれ征かんの気概にとりつかれた。

父親だかおじいちゃまだか知らないが、ゾロゾロ、ノソノソ出て来た。こういう女子ども優先、支配の場では、男どもの動作はかえつてぶざまに見える。事実のろまにもなる。ようやく幼稚園の小さな運動場のまんなか集まつたのは総勢で十三人。これを旗を持つた若い女の先生が二つに分けたが、

六人と七人、どうしても半ばになる。じゃあ、というわけでべつの若い女の先生が六人衆に加わって、数だけとはかく七人と七人とで半分半分。

わたしは女の先生加勢組のなかに入った。これでは勝つはずはない。その上、この組、わたしのほかにおじいちゃまとしか言えない年より男が二人いる。ヒイおじいちゃまのわたしより年少であることはたしかだが、それでもハゲ頭が六十歳代後半、まず半分はシラガのゴマ塩頭が五十歳代後半と、わたしはまず読んだ。わたしのこのとつきの年勘定はあとでまさに正確だったことになるが、とにかくヒイおじいちゃまにしろおじいちゃまにしろ、年寄り男が三人いる。そして、あとの男二人、これはあきらかにパパで、若い若い、ひとりにはヒヨロヒヨロ瘦せたのと（こういうのはかえって夜になると人一倍元気になると、陰気なメガネをかけた顔を見たときに妙なことが連想された）逆に小ぶとりにふとった、動作も見ることには小男。この種の男は脂肪はついていないが、筋肉は案外瘦せていて力がない。これじゃあ、まだ若い女の先生のほうがましかも知れないと思つて彼女をふり返つたが、ソバカスだらけの、しかし、なかなかいける顔だちのこの先生も痩せつぼちで、腕などちよつと握るだけで折れそうだ。

先方の七人はどうか。まず決定的にちがつたのはおじいちゃま衆がひとりもいなかったことだ。これだけでも大いに差がつくと見えたが、先方の若いパパさんども、ひとりは三十歳代半ばと読んだが、あとはどう見ても二十歳代半ばか後半か。しかもこの若いパパさんども、からだは大きいし、みんな学生時代には運動部できたえた元気ハツラツ男ばかりだ。からだに充満するエネルギーをもてあましているのだろう、運動靴の足を忙しく動かして足踏みするひとときわ横幅の大きい男あり、両手をあげ

上半身を屈伸させて準備体操に余念がないノツポあり、はたまたこちらをイカクするように（それともどこかにいる自分の子どもに。パパのいいところを見せていたのか）四肢を踏むショート・パンツありで、それだけです。勝負のついた感じきりであった。バアさん、声をはり上げて、おじいちゃん、これじゃあ負けると言つてよこしたが、あは、だから、がんばれ、と激励したのか。負けるからよせ、と言つたのか。それとも、負けるからいいキミだと言いたかつたのか。つ、ちは、おじいちゃん、がんばつて、とこれは真面目に声援していた。直子は何が面白くてこんなことをしているという顔であったが、わたしがふり返ると眼があつて、とたんにお座なりに笑つてみせた。キク子は押せばうつるお手軽カメラをかまえた。

わたしらの負けは衆目の一致するところであつた。キク子もお手軽カメラのフラインダーをのぞきながらそう思つた、と言つた。それでも、おじいちゃんは何ごとにつけ奇蹟を起す人やから、奇蹟が起るかも知らへんと思つたと、「何ごとにつけ」に意味ありげに力を込めて言つた。そう思つたら、ほんとうに奇蹟が起つた。

あは、ほんとうにキク子の思い、祈りのおかげじゃない、おじいちゃん。

奇蹟とまではいかないが、異変ぐらいのことは起つた。老人三人組を入れたわたしの側の七人衆が先方の元氣ハツラツの七人衆にみごとに勝つてしまつたのである。それも三回戦やつて、三回とも勝つてしまつたのだから、完勝というものであろう。しかも、この大勝利、どう見ても老人三人組の御活躍によるものであつたこと、これも衆目の一致するところであつた。バアさんが、あの三人のじいさん、ようやるな、強いな、とみんな言うていはりましたで、と大勝利の御活躍を終えて帰つて来

たわたしにスシやらケーキやらをパクついている周囲を見まわしながらまず言った。ご苦労さんでしたと直子。キク子は、勝利の感激、ハイ、ガッツ・ポーズ！　そう言つてカメラをまたかまえる。つち、ひとりが、おじいちゃん、勝つておめでとう、と言つてくれた。

大勝利の秘密は、彼我の力の大小というよりは力のちがいにあつた。それとも、これは、やはり、からだのできぐあいのちがいにあつたと言ふべきか。だいたいが今の若い衆、そういう若パパをふくめて、飛んだり跳ねたり走つたりすることは、小さな子どもときからいろんなスポーツやつているからよくできる。しかし、むやみと重い米俵のようなものをついでり背負つたり、あるいは綱引きのようにただバカ力を出して引つぱるといふこととなると、若い衆のからだ、もともとそんなふうにでき上つていないのか、それともそういうバカ力を出す訓練をまるつきりやつて来なかつたからか、連中はモロに弱いところがある。そこへいくと、われら老人衆、長年の粗食、粗衣、粗住の上に、殴られたり蹴られたりして鍛えられている。おかげでからだはひたすら頑丈になり、バカ力もできる。重い物をつぎ、背負い、さらにはその重い物をついで走り、夜も寝ないで歩く、そういうバカ力、さらには耐久力である。

あなたは兵隊に行つたね。わたしはハゲ頭に言った。行つてましたで、そら。そやから力、強いんだ。綱を引きながら、わたしがつづけると、そやけど、わたし、ヒコーキ乗りでしたんや。ハゲ頭は意外なことを言つた。それでもキツかつたでつせ。そら、そうやる。おたくは？　南方へ連れて行かれたけど、わたしは兵隊とちがう。司政官、とわたしはつづけた。（佐官待遇の）とまでは言わなかつたが、判つたのか判らなかつたのか、それでも、かなりなえらいさんだつたと見当はつけたのではな

いか。あなたは——とわたしは質問のホコ先を半白のゴマ塩頭にむけたが、そちらのほうは、ぼくはまだ国民学校に行っていました、終戦のときは中学の一年生でしたけど、とハゲ頭のもとヒコキ乗りよりもっと意外な答を口に出した。なんだ、そんな坊やだったのがもうこんな年かといささかおどろいたが、そして何やら鼻白む気持になったが、考えてみると、戦争が終ってからでももうそれだけの年月が経っているのだ。

しかし、ぼくら軍国日本の昭和の少国民だったから、からだは強いですよ。昔のことだ、ろくなものを食っていませんが、かえってそれでからだはシンが頑丈になる、とゴマ塩頭はわたしが思っていたようなことを言った。子どものとき、重量物運搬競走というのがありました。砂を入れた袋かついで走るのです。しかし、何んでもまたあんなへんてこな競走やったのですかね。ゴマ塩頭の述懐に、そら、あんな、強い兵隊をつくるためですがな、と即座にハゲ頭が応じる。この綱引きのためでもあります。がな、とわたしが口を出した。すべては綱引きの最中のことである。この綱引きに勝つためですがな。このわたしのことばに自然に粗食、粗衣、粗住の三人の昔の人間の気持がそろったのか、それぞれにコブされたのか、それなら、いっちゃん昔の人間の底力を見せてやれという気になった。ええい、とわたしが声をかけた。ええい、ええいと二人が応じた。三人の腕に力が入った——と思つたとたんに、マカ不思議なことだが、相手の元氣ハツツの七人衆は総崩れになった。トットトットと七人衆、足をふんばる。それは綱を引いていてこちらにも判つたが、ええい、ええい、ええいの三人の底力、いくら運動部で飛んで跳ねて走つてのトレイニングに励んで来るとはいえそれら今どきの若衆の力に立ちまざって、ズルズルズル、そしてすぐドウツと総崩れ、こちらがかえって反動で尻モチをつき

そうになった。

翌日、直子から電話があつた。つちが今自分のところに来ていたのだが、おじいちゃんのところに行きたがつているという。こんなことで何も電話して来ることはないだろう、しょつちゆううちへ来てバアさんと遊んでいるやないか、と言うと、ちがうんです、今日はこれからおじいちゃんに会いに行くと言うているんです。会うて、何をするのかね。いっしょにおフロに入つたげる。昨日、おじいちゃん、つちの幼稚園に来てくれて、綱引きやつてくれたから、そのゴホウビにいっしょにおフロに入つたげる、と言っています。

ああ、それなら、小一時間あとで連れて来てくれ、とわたしは言った。お願いがあるんですの、と直子はわたしのことを無視するように言った。口調が少しせつぱつまっている。おフロのあの……彼女はちよつと口ごもつた。あの女の人、かたづけておいていただきたいんです。一瞬、何を言っているのか判らなかつたが、ああ、あのジャッキーのことかいな、ジャクリーヌ・ケネディ、いや、それからジャクリーヌ・オナシス。判つたとも、彼女のことば通り、あの世界一の強国の若ボスのハート射抜き、世界一の大金持の老いぼれのイチモツをふるい立たせた女のぼりうれたんのパズルを壁から外してかたづけておくとも言わなかつた。ただ、小一時間経つたら連れて来てくれ、とさつきの

ことばをくり返した。小一時間かかって、あっちこっち、はずれて穴ボコになってしまっているパズルをまたはめ込んで、ぼり、うれたんのジャッキ、みごとなものに仕立てあげておいてやろうと思つてのことだ。このさつきからの決心にゆらぎはない。

実際小一時間かかってマンゴーを両掌にしたジャッキが完全にでき上つたところで、つちが直子に連れられてやつて来た。ビニール袋に彼女の例のクジラの海洋会議のぼり、うれたんを入れて持参して来ている。この子、おじいちゃんとおフロで遊びたいのですよ。そう言つておうちから自分でもつて来た。じゃあ、キク子が連れて来たらよかつたのに、とバアさんがそばのつちを見て言つた。キク子さんはこのごろ車の学校へ行つて忙しいんです、つちがませた口をきいた。それでそのあいだ、キク子さん、わたしのところにつちをおいて行くんです。直子はちよつと不機嫌なところがある口調で、つちのことばのあとをつづけた。キク子さん、ドライバーのライセンスをおとりになるつもりらしい。日本語で言えばいいものを直子は英語を使つて言つた。バアさんにもそれぐらいの英語は判るのか、フンフン、とうなずく。車を買うつもりかね。わたしが口を出した。ベンツかね、ボルボかね。わたしは車のことなど知らないが、出まかせに出て来た車の名前を口に出した。わたしのところはニッサンですよ。直子は無然としたふうに言つてから、あれ、かたづけしておいて下さいましたのね、とわたしをじつとみつめながらつづけた。フンフン。わたしは曖昧にうなずいた。

これ、なあに。

壁いちめんのぼり、うれたんを見て、つちはあきらかに不服げであつた。

このおおもつ持っている女の人の誰。

彼女もバアさんと同じことを言った。

ジャッキー。この人のダンナさんはな、世界でいちばん強い国のいちばんえらい人やった。そやから、世界でいちばん強い人やった。

フウン、とつちは興味なげにうなずいた。

この人がボタンを押すと核戦争が始まって、世界がおしまいになる。

つち、はもううなずきもしなかつた。

キノコ雲見たことあるか。

わたしはかまわずつづけた。

その世界でいちばん強い人がボタンを押すと、地球全体がキノコ雲になる。

壁のジャッキーは白いワンピースを着ていたが、わたしははだかであった。つちもはだかで、ただ手にビニール袋を下げている。例のクジラの海洋会議のぼり、うれたんを入れたビニール袋である。年とつたのと若いのと、それも極端に年とつたのと極端に若い日本人の男女がどちらもヌードで着衣のアメリカ女にむきあっている。

わたしは話題をかえた。

この女の人のその次のダンナさん、世界一の大金持やったから、この人、欲しいもんは何んでも買うてもろうたみたい。

じゃあ、このおいもも買うてもろうたん？

つち、はお愛想に相槌をうってみせるように言ってから、ぼり、うれたんのジャッキーの両掌の上の黄

色の堆積物を指で弾いた。けつこう力を入れていたらしく、ジャッキはさえないにぶい音ながら、ちの小さな指の動きに音をたてて返事をした。

おじいちゃんは強い人？

そうやで。

世界でいちばん強い？

それはどうかね。

わたしは笑った。

おじいちゃんはお金持？

そうやで。

世界でいちばんお金持？

それはどうかね。

わたしはまた笑った。

これ、買える？

つちの小さな指がジャッキのおいもをまた弾いた。

もうそれで問答は終りだ。

つちはつちが持つて来たのをはる。

彼女は宣言するように言った。手に下げたビニールの袋を乱暴に動かしている。

おじいちゃん、もうこれかたづけてちょうだい。

つちは眼顔でジャッキーをさした。

でないよ、つち、おじいちゃんとおフロに入らない。

彼女は湯ぶねを見ながら宣言をつづけた。

綱引きの二人のパートナア、もとヒコーキ乗りのハゲ頭と半白ゴマ塩頭の昭和の少国民のことはしばらくまったく忘れ去っていた。べつにあの日、綱引きのあと名刺交換してあらためてアイサツしたから、忘れてしまうほうが自然であつたにちがいない。だから、それから十日ほど経って、二階の書斎から庭へ出ようとして下の客間に降りて来たわたしを見て、例によつてバアさんを誘つてこれかどこかへ買い物にでも行こうとしていたらしいキク子が、あのハゲさん、おじいちゃんによろしく言うてはりました、と言ひ出したときには、それ、誰のことや、と訊ね返していた。忘れはりましたか、ついこのあいだのことやのに、おじいちゃんあのときの御活躍、御勝利の一戦のご戦友、……綱引きはつたときの仲間。そこまでキク子に言われてもかいかいも思ひ出せなかつたのだから、わたしのもの忘れもみごとである。あのとき、その人、ヒコーキに乗つてはつた人やと言うてはりましたで、とバアさんが口をきいて、それでようやくハゲのもとヒコーキ乗りのことを思ひ出した。

あの人に会ったのか。

会いました。

喫茶店で仲むつまじくキク子とむかいあわせに坐ってお茶をのんでいる老いぼれの姿がとたんに眼に浮かんで来たが、それはいくらなんでも考えすぎというものだ。

何してる、今はあの人。

今は、と口に出たのは、もとヒコーキ乗り、が念頭にあつたからだ。

キク子の先生。

先生？

キク子は意外な答を口にしてから、いたずらっぽくクスリと笑った。

車の先生。キク子に車の運転教えてくれてはる人。キク子、今、車の学校に行っている。

今どきの若い女性は、キク子のようにもう二十七、八歳になってトウの立ってしまったのまでが、まるでつちほどの年の小さな子どもそっくりのもの言い方をする。何がキク子だ、わたし、と言え、と言いたくなるが、なにしろキク子は、つちの母親だ、文句をつけるのはやめにした。

知っている。直子が言っていた。車はベンツを買うのかね。

このあいだの直子とのやりとりを思い出しながらきいた。

あれはこのごろではヤーさんの乗る車。

そう言えば、吉田もこのごろではベンツに乗っているな、とわたしは思った。

じゃあ、ボルボか。

彼が乗っているのは、サブです。同じスエーデン製の車に夫婦二人が乗ることないでしょ。

キク子は憤慨したように言った。

キク子はもつとちつちやくて、かわいいのがいい。ミニなんか、安いし、あれでけっこういい。つ、ちもミニがいいと言っている。

そうか。

としか言いようがない。

ま、とにかく、あのハゲ、自動車学校の先生なんか。

ちがいます。ちがいます。

キク子は大仰に否定した。あの人、車の学校の先生をするような貧乏な人やない。お金持よ。おじいちゃんちがつてほんとうのお金持。

キク子は笑った。

何している人かね。

予備校の経営者。おじいちゃん、知ってはる、予備校は儲かる。

もとは小さなジクをやっていた。小金で二、三人教師を雇ってやっているうちにだんだん大きくなって、大きくなるとともに有名にもなつて、今は日本のあちこちに学校ができるほどの大きなものになった。県庁所在地に必ず一校をつくるつもりでいて、すでに四分の一ほど目的は達成されている。彼の成功の秘密は、いち早くヘンサ値による予備校生の志望校の選定、決定を取り入れたからで、おかげで、巨万の富をもとヒコーキ乗りのハゲはつくり上げた。ヒコーキに乗ってはったから、彼、

理科的アタマの持ち主なんでしょ、だからヘンサ値なんかに目をつけはったんちがう、と言つてから、キク子はハタと気がついたように、おじいちゃん、ヘンサ値いうて知つてはる、と慌てて訊ねた。だけど、もうあのハゲさん、引退して、息子さんが学校をやっている。引退して、ひまがあるので……

車の先生になつた。キク子の話はようやくそこまでたどり着いたが、車の先生と言つても、ハゲはべつに自動車学校に雇われて毎日、朝から晩までどうにもならん下手クソどものつきあいして車に乗っているわけではない。

このごろは車に乗らんとそれこそ人間じゃないという世の中なので、自動車学校へ人が殺到する。いきおい、車に乗つて実地に運転する時間は限られる。そういうことになつて来ると、先生のほうが忙しくてくたびれて来る上に売り手市場で態度がでかくなつていばり出す。教える相手の下手クソが自分よりはるかに金のあるような連中が多いので、余計コンチクショウとばかりにいじめにかかつたりする。ことに若いきれいな女性となると、そしてどうにもこいつ親密になれる見込みがないとなると、徹底して意地わるになる。キク子がそう。キク子は当然のごとく言つた。

そういうのを相手にしてか、免許取得には関係ないが、市の交通公園とかいうところで一時間くらいでベテランの先生がついて教えてくれるところがある。言うなれば正規の学校に対するジユクである。その先生方は停年退職後のホビーでそんなことをしている人たちなので、親切懇切テイネイに教えてくれる。その自動車学校ならぬ自動車ジユクで補習授業を受けると正規の自動車学校で免状もらうのが早くなる。なんだかまだるっこしい奇妙な話だと思つたが、そういう奇妙なことが多い

のが今やわが日本国である。判った、つまり、あのハゲはその車ジユクの先生か。そう、ホビーである人やっていはる。キク子がしめくりをつけるように言った。

このあいだ、綱引きのときに出て来たはったときに、よう似てはる人いると思うたら、やつぱり。キク子、人の顔おぼえるのがすごうつく下手。

キク子はまた舌足らずな言い方をした。

先方さんは知ってはったみたい。あの人、おじいちゃんですか、と訊きはったさかい……  
どう答えた？

ヒイおじいさん。キク子、そう答えた。

わたしとバアさんの顔を見くらべて、彼女は笑いながらすぐ応じた。

それからまた、二、三日経って近くの川べりの公園を散歩していると、やあやあ、と手をあげてアISAツする男あり。誰かと思つたら、そのもとヒコーキ乗りのハゲであつた。キク子の話がなかつたら、そのやあやあにこちらもやあやあで応えて、それですんでしまつていたのかも知れないが、彼女の話のおかげで、わたしは立ちどまり、先方も立ちどまつて、はじめは公園のベンチ、それがちよつと風が出て来ましたな、コーヒーでものみましようかということになつて、喫茶店でむかいあつての

対話になった。

何をしゃべったか、あらかた忘れてしまった。記憶に残っていることのひとつは、ハゲが海軍のほうのヒコキ乗りであったことだ。陸軍サンのヒコキとちがつて海軍のヒコキは海上はるかを飛んで行くので、パイロットは「洋上航法」とやらを学んでおかなければならない。それだけでも海軍サンはドンくさい陸軍サンのヒコキ乗りとは格がちがう。そこへもつて来て、ハゲはヒコキ乗りとしてはエリート中のエリートの戦闘機乗りであった。そして、とにかく生き残った。真珠湾攻撃からとまでは行かなかったが、そのすぐあとぐらいから実戦に出て、はじめは航空母艦発進の戦闘機、言わずと知れたゼロ戦である。それがそのうち地上から飛ぶようになったのはかんじんの航空母艦がしこたま沈められてしまったからである。まだ、あんた、若かったんやろ。そうですがな、わたし、世に言うところの少年航空兵でしたんや。七つボタンの何んとかいうんやったな。かつこよかつたわけや。しかし、特攻隊は行かんですんだんか。行つてたら、わたし、ここにこうして坐ってませんがな。おたくといつしよに孫のために綱なんか引いてませんがな。特攻隊は逃げたんか。逃げたんやありませんがな。そんな非国民とわたし、ちがいます。戦争の終り近くになると、わたしみたいな少年航空兵上りの生えぬぎのパイロットは教員として貴重なことになりますねんやがな。とにかく学生あがりの新米に操縦のイロハ教えて、なんとか飛べるようになったところで特攻にしたてあげる。そいつを突つ込ませる。それでもわたしがいた海軍が陸軍サンなんかにくらべてましやったと思うのは、そういう気の毒なお人が何月何日、どこでどう突つ込んで行つたかの記録がとにかく残っていることや。陸軍サンはそんなものも残しとらんものやからひどい。

しかし、今、その海軍サンも陸に上つて車の先生してはる。

陸軍サンがコケにされていると思う氣持になつたのには、やはり、わたしが陸軍サンの軍属で司政官になつていたからではないかと思う。あのころは陸軍サンの軍属の軍服着て、警察の上司の部長が「出征」のお祝いにくれた大きな軍刀を腰にさしていた。七つボタンのようなそのころの女子どもがよろこんだようなかつこよさではなかつたが、こつちもまだまだ若かつたからあれでなかなか見覚えがした。現地で使つていたメイドが、いつもトアン、ナンバー・ワン、ナンバー・ワンと言つていた。わたしはテレマカシ、テレマカシ、と言つてやつた。アリガトさん、アリガトさんというぐらいのことだが、べつにあの子にわたしは手をつけたわけではない。なかなかきれいな子だつたが。あれは今から考えると、ちよつと惜しい。

車の先生どころか、わたし、レーサーもやつたことありまつせ。

ハゲがコーヒーのあと運ばれて来たコブ茶をひとのみして言つた。この喫茶店、コーヒーのあと必ずコブ茶を運んで来る。無料である。それが目あてか、年よりの客が多い。年金でくらしているのか。みんな、とろけた顔をしている。とろけた顔でコブ茶をのんでいる。

まだ、日本でカーレースが始まつたばかりのころや。わたし、鈴鹿のサーキットで、それやつてましたんやで。二百キロとか三百キロとか、そんなのを出した。みんな、こわがつてはつたけど、わたしは平氣やつた。なにしろ、時速六百キロというような戦闘機に乗つてましたんやからな。今のジェットやつたら、千キロぐらい出しよるけど、プロペラ機で六百キロ。これ、なかなかのものです。

ゼロ戦かね。

つづきは製品版でお読みください。